

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03058

研究課題名(和文) 中世後期日明関係の人的基盤の研究 「初渡集」「再渡集」を中心に

研究課題名(英文) A Study of the Human Infrastructure of Late Medieval Japanese-Ming Relations:
Focusing on the "Shoto-shu" and "Saito-shu"

研究代表者

須田 牧子 (SUDA, MAKIKO)

東京大学・史料編纂所・准教授

研究者番号：60431798

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、最後の遣明船となった天文16年度船において正使を務めた策彦周良の旅日記「再渡集」の史料研究を行ない、中世日明関係の中核をなす遣明船派遣事業がどのような人間に担われていたのか、またどのような経過と交渉を重ねながら当該事業が維持されていたのかを明らかにしようとするものである。研究期間中に「再渡集」の精読を完了し、翻刻・読み下し・注釈・現代語訳・人名録を作成し、収集分析した参考史料を付して研究報告書としてまとめた。また得られた成果の一部を論文等の形で公刊した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日明関係は明皇帝に日本国王が朝貢するという関係を基本として営まれた。日本国王が明に送った使節団に参加した人物のまとまった日記としては、現状三点が知られている。「再渡集」はそのひとつで、日本使節が寧波近海に到着してから、様々な交渉を行ないつつ、寧波から北京まで長距離に及ぶ運河の旅を耐え、朝貢を成就させて帰路につくまでの日々の記録である。本研究はこの記録を翻刻し、人名・地名・用語等の注釈を958項目にわたって作成し、現代語訳を試みたもので、日明関係の生々しい現場の記録を一般にも読みやすい形で提供するとともに、日明関係史研究のための基礎的かつ最新の知見を広く提示するものである。

研究成果の概要(英文)：This research project is an archival study of the travel diary of Sakugen Shuryo, Saito-shu. He was the leader of the last delegation sent by the King of Japan to the Ming Emperor. By studying this diary, we have attempted to determine specifically who was in charge of diplomacy between Japan and China in the Middle Ages, and what kind of negotiations took place between the two countries. Through this research, we have reprinted, annotated, translated into contemporary language and compiled a list of characters. We then combined these, together with reference materials, into a research book. Some of our results have also been published in articles and other publications.

研究分野：日本中世史

キーワード：日明関係史 入明記 再渡集 初渡集 策彦周良 遣明船

1. 研究開始当初の背景

中世対外関係史研究は、1980年代以降飛躍的な進展を遂げ、東アジア海域史研究という新しい分野をも生みだし、活発な研究活動によって、現在に至るまで多くの成果が蓄積されている。2000年代以降の特筆すべき動向としては、それ以前においては日朝関係史研究に比しては低調な状態にあった日明関係史研究が、史料研究と現地調査の進展により、著しい深まりを見せたことが挙げられる。35人もの執筆者を集めて2015年に刊行された『日明関係史研究入門 アジアのなかの遣明船』(村井章介ほか編、勉誠出版)はその象徴であり、専門を異にする執筆者がそれぞれの立場から14世紀～16世紀日明関係の諸相を総論2・総説6・項目69にわたって論じ、この分野の研究の進展を如実に示した。この動向がいくつかの大型科研の恩恵によるものであることは明白で、特に2005～2009年度特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」・2010～2013年度基盤研究(B)「前近代東アジアの外交と異文化接触」は専門を異にする研究者間の交流を密にし、日本史や日本文学の研究者を中国での現地調査に誘い、中国史の研究者を日本側史料の読解に誘って、14～16世紀における日明関係の実態を複眼的に解明するという点において大きな成果を挙げた。その中心的な成果の1つは、16世紀の遣明船において副使・正使を務めた策彦周良の旅日記「初渡集」を講読しては現地調査を行うという作業を丹念に続け、8年かけて寧波から北京までの遣明使節の中国における全行程を踏破したことにある。これにより16世紀日明交流の具体像は一新されたのである。

研究代表者は上記科研に2007年より参加したが、それ以前より、中世日明関係研究が低調な理由の一端は研究の基盤となる史料の集積とその史料学的な検討が手薄であることにある、日明関係の基礎史料の史料学的検討を行い、周辺史料の検索を進めて日明関係史史料群の裾野を広げ、それをもとに各遣明船の動向を追い、東アジアという広がりの中で日明関係を捉えなおしていくことが不可欠の課題であると考えていた。この認識に従い、2006～2007年度若手研究スタートアップでは、日明関係史料の根幹をなす史料群「策彦入明記録及送行書画類31種・14種」の全点マイクロ撮影・デジタル撮影を初めて行ない、これを所属機関の図書室に納めた。これによって初めて公的機関に史料写真が架蔵されて閲覧可能となり、実証研究のための学界共通の基盤を整えることができた。さらにこれら史料のテキストデータ化を進め、試験的に前述の「初渡集」講読会の場にも提供した。続く2008～2011年度若手研究(B)では、テキストデータ化を引き続き行うとともに、「策彦和尚送行書画類31種・14種」に含まれる史料の写本の作成・流通状況の調査と、関連する周辺史料の収集に着手した。また最古の入明記である「笑雲入明記」(15世紀半ば、宝徳度遣明船に従僧として乗り組んだ笑雲瑞訥の日記)の史料研究を進め、2010年には注釈書『笑雲入明記 日本僧の見た明代中国』(平凡社東洋文庫、村井章介・須田牧子編)を公刊した。2013～2016年度若手研究(B)においては、写本の作成・流通状況の調査と関連史料の収集を継続し、この成果を中近世における外交遺産の蓄積と流通という観点から整理を図った。

2. 研究の目的

上述の成果を踏まえて次になすべき課題は、「初渡集」「再渡集」の注釈書の作成である。16世紀遣明船において一度目は副使、二度目は正使として入明した策彦周良は、両度ともに大部の旅日記を残した。一度目の旅日記を「初渡集」、二度目の旅日記を「再渡集」という。このうち「初渡集」については大型科研により講読が行われ、多彩な成果を挙げたことは先述の通りである。だがこれらの成果は個々の論文として結実したが、史料研究という形では十分に公にされなかった。4冊本である「初渡集」のうち、中巻・下巻の講読は行われたが、残る2冊(上巻・下之下巻)には手がつけられず、また公刊されたのは中巻の翻刻のみで、注釈は付されなかった。「再渡集」に至ってはこれまで講読が試みられたことすらない。これは当該科研の研究課題の目的が史料研究そのものにはなかったことに起因するが、注釈書として公刊した『笑雲入明記』が他分野からも多く引用され、さらには一般の観光旅行における歴史ガイドとして携行されるなど、予想以上に広範に利用されていることを考えると、先の大型科研の成果、特に現地踏査の成果を踏まえ、またこの間研究代表者が積み重ねた史料研究を基礎として、注釈書を作成することは、当該分野のレベルの底上げと研究成果の普及のためには最も必要なことと考えた。

3. 研究の方法

以上を踏まえ、本研究課題においては、「再渡集」の精読を行なって翻刻及び注釈を作成することを最大の目的とし、併せてそこに登場する人物の詳細を追究し、中世社会のなかでどのような立場にある人間がいかなる形で遣明船派遣事業に関与していたかを解明すること、また日記の筆者である策彦の履歴を復元していくことを目標として定め、そのための具体的な研究活動として下記の三つの柱を立て、研究を進めた。

『再渡集』の精読：策彦周良が正使を務めた時の日記である『再渡集』の講読会を行って精読し、翻刻と訳注を作成する。

『初渡集』『再渡集』の登場人物の研究：上記『再渡集』と、策彦周良が副使を務めた時の

日記である『初渡集』の登場人物リストを作成し、彼らに関わる日本側史料を探索し、人物像とその国内社会における地位を明らかにすることを通じ、遣明船経営を支えた人的基盤の分析を行なう。

策彦周良関係史料の収集：策彦周良自身の履歴の復元をめざし、史料を収集する。

4. 研究成果

(1) 「再渡集」の翻刻ならびに注釈の完成、報告書の刊行(柱)

研究分担者および研究協力者とともに隔月2日間の研究会を実施し、「再渡集」の講読を進めた。2017年度～2019年度前半までに計15回30日間の講読会を行なって、翻刻と注解をひととおり完了した。また2019年度後半からは、中国官僚の文集「斃餘雜集」について4回8日間の講読会を行なった。2020年度にもこれを継続して行なう予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で中断し、2021年度・2022年度と期間延長を繰り返したが、結局、講読会を再開することができないままに本科研期間を終了することとなってしまった。また予定していた中国での現地調査も行なうことが出来なかった。

講読会は、毎回担当を定め、翻刻・読み下しと注釈・現代語訳を作成し、講読会後にその成果を反映した修正稿を提出するという手順で行なった。修正稿は研究代表者のもとでとりまとめ、併せて人名索引を作成した。とりまとめや人名索引の校正はODの雇用により行なった。2020年10月にはとりまとめた修正稿にある程度の体裁の統一をかけたうえで、「訳注『再渡集』(稿)暫定版」を作成し、講読会参加メンバーにPDFで配信した。この暫定版をもとに2023年には大幅な加除修正を施したうえで、解説・附録などを付して、研究成果報告書『訳注『再渡集』(稿)』(東京大学史料編纂所研究成果報告書2022-6)として刊行し、国内主要機関および関係者に送付した。この報告書の校正は、研究分担者の岡本真・山崎岳と共に行なった。

報告書は、全350頁、翻刻・読み下し注釈編・現代語訳の本編に参考史料7点を収めた。収録した注釈数は958項目に上り、地名については先行の大型科研による調査成果も整理して織り込んで提示し、勘合や通交規制など日明関係の根幹に関わる重要な問題については紙幅を割いて最新の知見を盛り込んだ。また「斃餘雜集」講読の成果により、日本使節を迎えた中国側官僚についての詳細が相当数判明したので、中国側人名比定については予想より精度を上げることが出来た。さらに柱に関わって行なった芳洲会所有「嘉靖公牘集」の調査・研究により、「再渡集」に記載はされるが、詳細が明らかでなかった事件等についても概容を把握することが出来たのでこの成果も追加した。「斃餘雜集」は講読会が中途半端に終わってしまったため収録を見合わせた。また「嘉靖公牘集」については人名注を施した上で、参考史料として当該報告書に収録した。なお「斃餘雜集」については、研究分担者の山崎岳により「朱紉『斃餘雜集』自序：解題と訳注」(『奈良史学』37、2020年)が公刊され、著者の朱紉と文集の内容について詳細に知ることができる。

(2) 「初渡集」下巻の人名録の完成(柱)

「再渡集」と同じ策彦周良の手になる「初渡集」の下巻については、上述の通り2013年度まで継続した大型科研により講読会が行なわれていたが、その成果は未整理のままであり、史料研究としては未刊であった。これについて、ODの雇用により、成果物のとりまとめの作業を行ない、人名索引を作成し、2018年8月に「『初渡集』下 統合版」・「『初渡集』下 人名録」としてまとめ、旧科研メンバーにPDFの形で配信した。これを研究代表者がさらに加除修正を施したうえで前項の報告書に載せる予定でいたが、注釈数1000項目以上と、予想以上に膨大な量となったために、研究期間内に修正作業を完遂できる見込みが立たず、また一冊の報告書に収載しきれぬ量でもなかったために断念し、完成した人名索引の収録も見合わせた。「再渡集」の成果を基礎として、いずれ「初渡集」全体の注釈書という形でまとめることを期したい。

(3) 関連史料の収集と紹介(柱)

策彦周良関連史料の収集の紹介の一環として「大明譜」「謙齋南遊集」について、史料研究を行ない、その成果を翻刻とともに公刊した(岡本真・須田牧子「妙智院所蔵『大明譜』」『東京大学史料編纂所研究紀要』30、2020年。岡本真・須田牧子「妙智院所蔵『謙齋南遊集』」同31号、2021年)。前者は天文16年度船に参加していた柳井郷直による手記で「再渡集」を補う関係にあるものである。後者は初渡時・再渡時に策彦が詠んだ詩句を収集したものである。

さらに策彦周良の交友関係の把握を目指して、彼の詩文集である『謙齋雜集』『謙齋詩集』等を読み進めるとともに、他の文集等に含まれる策彦の作品の収集作業を行っていたが、その過程で『謙齋詩集』の諸本間に相当の異同があるのに気がつき、その整理に着手した。諸本の対校は終わったが、この成果の公刊は今後の課題である。なお策彦の作品の収集という点に関しては、研究分担者の岡本真による「宮内庁書陵部所蔵『聯句』にみる策彦周良の周辺」(『市史研究ふくおか』18、2023年)が公刊されるなど、一部の成果はすでに公にされている。

(4) その他

本研究課題の主たる成果は上述の研究成果報告書に詰め込むことができ、関連する史料研究も(3)に記したとおり、その一部を公刊することが出来た。これは予定通りの成果であるが、その他の成果として、須田牧子「遣明使節の旅路」(『日本歴史』872、2021年)・同「策彦周良の

旅路」(木村直樹編『大学的長崎』昭和堂、2018年)・同「遣明使節と西湖」(『西湖憧憬』神奈川県立金沢文庫、2018年)など、『入明記』を全面的に使用した論文や小論、また山崎岳「宋素卿東渡日本考 寧波事件の歴史的前提」(上田信・中島楽章『アジアの海を渡る人々』春風社、2021年)・須田牧子「最末期の遣明船の動向と「倭寇凶巻」」(同)・岡本真「戦国期の京都商人と対外貿易 遣明船から南蛮船・朱印船へ」(『日本史研究』691、2020年)など、16世紀の日明関係について論じた論文なども生み出された(詳細は後掲の「主な発表論文等」参照)。史料研究を行ない、その詳細を公開するとともに、その内容を踏まえた論文を書くことで当該分野の進展に貢献するという、歴史研究の理想的な形を本研究課題においては実現できたと考えるものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岡本真	4. 巻 18
2. 論文標題 宮内庁書陵部所蔵『聯句』にみる策彦周良の周辺	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 市史研究ふくおか	6. 最初と最後の頁 19/27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎岳	4. 巻 11
2. 論文標題 アジア海域における近世的国際秩序の形成	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『岩波講座 世界歴史』	6. 最初と最後の頁 163/182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須田牧子	4. 巻 872
2. 論文標題 遣明使節の旅	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 45/54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須田牧子	4. 巻 -
2. 論文標題 最末期の遣明船の動向と「倭寇図巻」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 上田信・中島楽章編『アジアの海を渡る人々』（春風社）	6. 最初と最後の頁 48/80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎岳	4. 巻 -
2. 論文標題 宋素卿東渡日本考 寧波事件の歴史的前提	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 上田信・中島楽章編『アジアの海を渡る人々』(春風社)	6. 最初と最後の頁 81/118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡本真・須田牧子	4. 巻 51
2. 論文標題 妙智院所蔵「謙斎南遊集」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京大学史料編纂所研究紀要	6. 最初と最後の頁 133/161
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎岳	4. 巻 901
2. 論文標題 海禁とはなにか：中国史の立場から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史地理教育	6. 最初と最後の頁 12/17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎岳	4. 巻 37
2. 論文標題 朱【ガン】『甕餘雜集』自序：解題と訳註	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 奈良史学	6. 最初と最後の頁 84/101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡本真	4. 巻 691
2. 論文標題 戦国期の京都商人と対外貿易 遣明船から南蛮船・朱印船へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本史研究	6. 最初と最後の頁 46/67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡本真・須田牧子	4. 巻 30
2. 論文標題 天龍寺妙智院所蔵『大明譜』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京大学史料編纂所紀要	6. 最初と最後の頁 196/210
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡本真	4. 巻 -
2. 論文標題 室町幕府と明・朝鮮	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 高橋典幸・五味文彦編『中世史講義』筑摩書房	6. 最初と最後の頁 183/200
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須田牧子	4. 巻 83
2. 論文標題 「倭寇図巻」と蘇州片	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信	6. 最初と最後の頁 16/17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須田牧子	4. 巻 -
2. 論文標題 遣明使節と西湖	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 神奈川県立金沢文庫編『西湖憧憬』	6. 最初と最後の頁 91/98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須田牧子	4. 巻 -
2. 論文標題 大陸への玄関口 五島列島と周辺の島々	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 木村直樹編『大学的長崎』昭和堂	6. 最初と最後の頁 159/173
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須田牧子	4. 巻 -
2. 論文標題 策彦周良の旅路	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 木村直樹編『大学的長崎』昭和堂	6. 最初と最後の頁 174/177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須田牧子	4. 巻 258
2. 論文標題 海禁政策と倭寇	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 歴史と地理 日本史の研究	6. 最初と最後の頁 1/16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 山崎岳
2. 発表標題 俞大猷の生涯
3. 学会等名 広島史学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 須田牧子
2. 発表標題 「倭寇図巻」再考
3. 学会等名 「真贋之間 文獻史學與美術史學的對話」工作坊（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡本真
2. 発表標題 弘治年間の遣明船の歴史的位置
3. 学会等名 名古屋中世史研究会10月例会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 須田牧子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ヨシダ印刷	5. 総ページ数 350
3. 書名 東京大学史料編纂所研究成果報告書2022-6訳注『再渡集』（稿）	

1. 著者名 岡本 真	4. 発行年 2022年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 308
3. 書名 戦国期日本の対明関係	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岡本 真 (OKAMOTO MAKOTO) (50634036)	東京大学・史料編纂所・准教授 (12601)	
研究分担者	山崎 岳 (YAMAZAKI TAKESHI) (60378883)	奈良大学・文学部・准教授 (34603)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------